イスラエルに鉄槌を

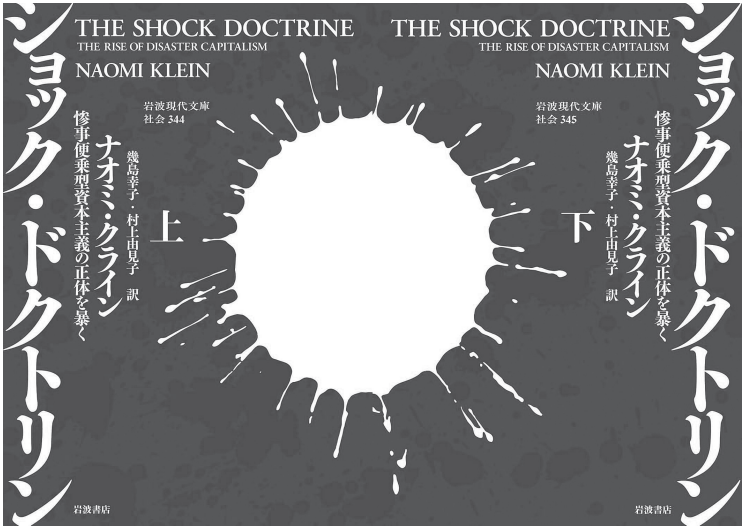
ユダヤ人がユダヤ人を殺した「ハーバラ協定」

目次

第1章　暗躍するイスラエルとアメリカの謀略機関「モサド」「ＦＢＩ」「ＣＩＡ」……1
第2章「ショック・ドクトリン」を応用した南米諸国の「クーデター」、アフガニスタンにおけるＣＩＡの「サイクロン作戦」……25
第3章　イスラム原理主義集団ハマスは、イスラエル謀略組織モサドにまんまと「のせられた」!?……47
第4章　チャーチ委員会による暴露、残虐極まりないチリのクーデター……73
第5章　ＣＩＡの「カラー革命」華麗なる戦術転換
——中東の「満州国」すなわちＩＳＩＳ「イスラム国」という国家を偽造する……107
第6章　イスラエルの蛮行
——国際司法裁判所が「大量殺戮（ジェノサイド）」と断罪！……147

第7章「ベトナム反戦運動」の再来か!?
——全米に広がる「ガザ虐殺（ぎゃくさつ）」「民族浄化作戦」への抗議運動 ……159
第8章「反シオニズム」と「反ユダヤ主義」は似て非なるもの
——若い米軍兵士アーロン・ブッシュネル氏の焼身自殺 ……169
第9章「コロナ騒ぎ」と「ウクライナ紛争」を裏で動かしていた国防総省（ペンタゴン） ……189
第10章 国防総省（ペンタゴン）が進める壮大な「生物兵器研究」、狙われる中東・中国・ロシア ……205
第11章 イスラエルは中東（西アジア）に配備された航空母艦だ！ ……221
第12章 ユダヤ人がユダヤ人を殺した「ハーバラ協定」
——「イスラエル国を解体せよ」と主張する超正統派のひとびと ……237
あとがき ……261

第１章　暗躍するイスラエルとアメリカの謀略機関「モサド」「FBI」「CIA」



現代の世界を読み解くための古典的名著

ナオミ・クライン

1

ウクライナ紛争がゼレンスキーの負け戦で終わりそうな雰囲気が強くなっているところに、二〇二三年一〇月七日、パレチナのガザ地区をめぐって血生臭い攻撃が展開されました。

かつて私は、ブログで（2023-10-22）、次のように書きました。

パレスチナのガザ地区における双方の戦闘が口に出せないほど残虐であったことは調べれば調べるほど明らかになってきていますが、そしてハマスによる攻撃がバイデン大統領とネタニヤフ首相による「やらせ」であった可能性も、ますます強くなってきたようです。

しかしウクライナにおける敗北から世界の眼をそらせる作戦であったとしても、バイデン大統領がウクライナとパレスチナの双方を軍事援助することが可能かどうかは極めて怪しいと思われます。ゼレンスキーは見捨てられるかも知れません。

ここで私は、ガザ地区の支配者とされる「ハマス」という集団がイスラエルの領土に奇襲攻撃をかけたことにたいして、「バイデン大統領とネタニヤフ首相による『やらせ』であった可能性も、ますます強くなってきた」と書きました。

しかし、なぜ「やらせ」だったと考えられるのか、これだけでは分からないだろうと思います。そこで更なる説明が必要になってきます。これについては、すでに『翻訳ＮＥＷＳ』でいくつもの記事が載せられています。それを列挙すると次のようになります。

（1）Hamas, Attack on Israel Is Puzzling
「ポール・クレイグ・ロバーツ：9・11偽旗作戦を彷彿とさせる、ハマスによる不可解なイスラエル攻撃」
http://tmmethod.blog.fc2.com/blog-category-22.html（『翻訳ＮＥＷＳ』2023/10/13）

（2）Is the Gaza-Israel Fighting "A False Flag"? They Let it Happen? Their Objective Is "to Wipe Gaza Off the Map"?
「ガザ・イスラエルの戦いは「偽旗作戦」？ 黙認？ 目的は「ガザを地図から消去する」ことか？」
http://tmmethod.blog.fc2.com/blog-entry-2016.html（『翻訳ＮＥＷＳ』2023/10/15）

（3）The Israel-Palestine Conflict: Netanyahu's "False Flag", Connecting the Dots – and More
「イスラエル・パレスチナ紛争：点をつなげばネタニヤフによる「偽旗作戦」などの陰謀が明らかに」
http://tmmethod.blog.fc2.com/blog-entry-2018.html（『翻訳ＮＥＷＳ』2023/10/16）

（4）Hamas' terror attack on Israel was similar to 9/11 in more ways than one
「ハマスによるイスラエルへのテロ攻撃は、さまざまな点で9・11に類似」
http://tmmethod.blog.fc2.com/blog-category-30.html（『翻訳ＮＥＷＳ』2023/10/20）

2

御覧のとおり、今回のイスラム原理主義集団「ハマス」によるイスラエルの攻撃は、かつて二〇〇一年九月一一日にニューヨークの世界貿易センターや国防総省（ペンタゴン）が旅客機で攻撃されたとする「9・11事件」との類似を指摘する論者が多いことが分かります。

たとえば、元アメリカ財務次官ポール・クレイグ・ロバーツは（1）で次のようなことを指摘しています。まず、ロバーツ元財務次官は、この事件を聞いてすぐに浮かんでくる疑問を次のように列挙しているのです。

イスラエル・パレスチナ間の紛争について見解を聞かれる。確かにこの紛争は、ウクライナ・ロシア間の紛争から目を逸らせるもののように思える。

人々（つまり「注意を払っている人々」）が不審に思っているのは、なぜパレスチナの人々がイスラエルにこんな風な攻撃を仕掛けたのか、だ。

というのも、こんな攻撃を仕掛ければ、ネタニヤフ首相にパレスチナ人に残されていた僅かな土地を手に入れ、ガザ地区を破壊し、ひとつの国に2つの国家があるという問題を解決させる口実を与えることになるからだ。

パレスチナの人々がイスラエルの人々を殺し、人質に取ったのだから、イスラエルを非難できる人などいようか？

世界最高と言われるスパイ機関「モサド」をもつイスラエルが、なぜあのように易々（やすやす）とハマスによる攻撃を許したのか、疑問は尽きるところがありません。ロバーツ氏はさらにそれを次のように続けています。

パレスチナ側が背信行為をおこなったという公式説明は耳にしたが、攻撃そのものについての説明は聞いていない。この行為は背信行為以上のものだったはずだ。

読者の皆さんと同意見なのだが、私もハマスがイスラエル側の作戦にまんまと嵌（はま）ってしまったことを奇妙に思っている。

さらには、この攻撃について何か腑に落ちないところがあることについても、皆さんと同意見だ。

ドローンやあんなにも多数のロケットが、イランから、あるいはウクライナから、どうやってガザ地区に運び込まれたのだろうか？

―　さらには、ハマスの戦闘員たちはどうやってイスラエルに入ることができたのだろうか？

欧米諸国からウクライナに送られた武器の3割しか前線のウクライナ兵士に届いていないということ、その7割が「闇の武器市場」を通じて世界に拡散していることは、今や公然の秘密になっています。

アメリカやイスラエルは「ハマスに武器を援助したのはロシアかイランだ」と言っているのですが、イランが援助しているのはシーア派イスラム教の「ヒズボラ」であって、スンナ派の「ハマス」ではありませんし、ましてウクライナ戦で忙しいロシアがパレスチナに手を出すはずがありません。

ですからウクライナに送られた武器が闇市場を通じて「ハマス」に渡ったと考える方が自然でしょう。元国連「大量破壊兵器監察官」として名声を博したスコット・リッター（Scott Ritter）も同じ考えであるようです。彼は次の論考（5）で、アメリカの武器が世界各地のいわゆる「過激派」の手に渡っていることを幾つもの事例で例証しています。

（5）Scott Ritter: Are Hamas fighters using American weapons meant for Ukraine?
（ハマスの戦闘員はウクライナ向けのアメリカ製武器を使用しているのか？）
https://www.rt.com/news/584413-hamas-fighters-us-weapons/　Oct 9, 2023

もしそうだとしても、「ドローンやあんなにも多数のロケットが、ウクライナからどうやってガザ地区に運び込まれたのだろうか？ さらには、ハマスの戦闘員たちはどうやってイスラエルに入ることができたのだろうか？」という疑問が残ります。

だからこそ、それは「黙認」「やらせ」だったのではないかという仮説が出てくるのです。ハマスによる攻撃が成功しなかったら、イスラエルはガザに攻撃をかけ、ガザの地からパレスチナ人を一掃する口実

がつくれないからです。

日本海軍による「パールハーバー攻撃」が成功しなかったら、アメリカは日本を攻撃する口実をつくれなかったのと同じでしょう。この攻撃が成功したからこそ、反戦気分に満ちていたアメリカ国民を、「第2次世界大戦への参戦」に変えることができたのでした。

3

支配者は自国民の命を犠牲にしてでも参戦の世論をつくりたがる、というのが元財務次官のポール・クレイグ・ロバーツ氏の意見です。それは次のようなロバーツ氏の自問自答につながっていきます。

元アメリカ財務次官ポール・クレイグ・ロバーツ

ハマスによる今回の攻撃は、9・11を彷彿とさせるものだ。

国家安全保障体制が確立しているアメリカのどの組織も、不思議なことに、二〇〇一年九月一一日の同時多発テロを防げなかった。それと全く同様に、アメリカがイスラエルのために設置した防空システムであるアイアン・ドームはじめ、イスラエルの国家安全保障体制も、不思議なことに、全く機能しなかった。

さらに、おかしなことに、ハマスの戦闘員たちは全く発見されることなく、陸・海・空からイスラエルに侵入した。もっとおかしなことに、大量の武器が、全く検出されることなく、イスラエルをと

おってパレスチナに運び込まれた。

こんな都合のいい落ち度があったとは到底信じられない。

イスラエル国内で安全保障面全般のこの落ち度についての責任を取らされる人が出てくるだろうか？見ものだ。

アメリカでも、9・11の安全保障面での落ち度の責任を問われた人は誰もいなかった。この事実こそ、我々にさまざまなことを考えさせてくれるべきものだ。

イスラエルは、「モサド」というスパイ機関に象徴されるように、世界で最も防諜体制が整っている国だと言われていますが、そのイスラエルで、どうしてこんな不思議なことが起きたのでしょうか。

だからこそ何度も言うように「やらせ」だったのではないかという推測・仮説が出てくるわけです。それをロバーツ氏は次のように述べています。

分かる術がないので、推測するしかない。イスラエル側に動機はある。イスラエルはパレスチナ人たちの残された土地を盗み取れる。

それ以外の動機として考えられるのは、イスラエルがこの紛争をさらなる激しい戦争に拡大することにより、今度こそレバノン南部の水資源を手に入れることができるようになることだ。

さらに、このイスラエルの動きにより、シリアやイランは煮え湯を飲まされることになるだろう。石油価格が高騰し、世界に混乱をもたらすことになるだろうからだ。

戦争に勝利し、パレスチナ問題を終わらせることができれば、ネタニヤフが抱えている法的問題や政治問題が追及されることはなくなるだろう。

考えてみれば、イスラエル側の動機はたくさんある。

しかし、この攻撃を可能にした安全保障面での落ち度という点はどうなのだろう？ なぜネタニヤフは、イスラエルの警備体制を止めることによって、ハマスがイスラエルを攻撃することを可能にさせたのだろう？

そんなことを考えるのは意味のないことかもしれないが、イスラエルがこのような状況を利用して、残されたパレスチナの土地を手に入れられると考えれば、あながち意味のないことではない。

9・11後の状況が、ネオコンがかねてより準備していた中東への戦争を仕掛けられる状況をつくりだしたのと同じように。

5

右で見てきたように、ロバーツ氏は「9・11事件」がアメリカが中東へと侵略する口実になったと述べています。この当時、ブッシュ政権の支持率は極端に落ち込んでいましたが、この「テロリストを撲滅する戦争」を宣言することによって、一挙に支持率が上がりました。

それと同じように、現在のネタニヤフ首相は、このハマスによる攻撃以前には、彼の提案した司法制度改革案は国民の総反撃を受けて、支持率が急落していましたから、ハマスによる攻撃は勢力挽回の好機となりました。その事情は次の東京新聞（2023.01.24）の記事からも見ることができます。

―　昨年末に発足したイスラエルのネタニヤフ新政権が、最高裁などへの影響力拡大を図る司法制度改

革案を発表し、弁護士グループや市民らが強く反発している。商都テルアビブなどでは10万人規模の反対デモが起き、エルサレムなど他都市へも拡大。「民主主義の危機だ」として改革の中止を求めている。

今月一一日に発表された改革案には、

▽全国の裁判官を任命する「判事選定委員会」委員を11人に増やし、うち7人程度を政府が指名

▽同委員会の賛成多数で最高裁長官を決定

▽最高裁判事15人中12人の賛成で法律の無効化が可能――などが含まれる。

この結果、政府の影響力が強まり、司法の独立が脅かされる可能性が指摘されている。改革案には野党や弁護士グループらが強く反発し、発表後から各地で反対デモが拡大。二一日にはテルアビブで10万人規模の集会が開かれ、集まった市民らが「民主主義を守れ」「ネタニヤフの独裁を止めろ」などと声を上げた。

この結果、イスラエル地元紙の世論調査では、改革への不支持が45％となり、現役の最高裁判事や検事総長、元最高裁長官なども公の場で反対意見を述べているほか、著名人や経済関係者の間でも反発が広がる事態となりました。

この記事は一月のものですが、デモや抗議集会はイスラエル全土に広がり、イスラエル軍兵士からも参加者が出るという事態にもなりました。パレスチナ人を弾圧する側にいたイスラエル軍からも抗議集会に参加する光景がＲＴニュースにも流れて、私はそれを興味深く視聴していました。

ですから、元財務次官ロバーツ氏の意見を自然に受け入れることができました。ネタニヤフ首相にとっ

てはイスラエル軍の動きを、政権に対するものではなく、ハマスやパレスチナ人に対するものへと転換する必要に迫られていたのですから。

6

さて以上のことから、ネタニヤフ政権がガザを攻撃したかった理由は理解できたのですが、問題は「あのようにハマスがなぜ易々（やすやす）と敵の罠に嵌（はま）ったか」です。ロバーツ元財務次官も同じ疑問を次のように自問自答しています。

難しい問いは、なぜパレスチナ人たちがイスラエルを攻撃するという自爆的行為にふみきったかだ。ハマスにはイスラエルを打倒できる見通しなどなかったはずなのに。

このことも推測するしかないが、今回のことは初めから終わりまですべてイスラエルの工作だった可能性がある。

イスラエル工作員がハマス内部に潜入していたのかもしれない。ちょうどＦＢＩがトランプ支持者や愛国者集団のなかに潜入して連邦議会への襲撃をあおり、彼らがテロリスト呼ばわりされるようになったのと同じように。

イスラエルの工作員たちは、イスラエルがパレスチナ人たちを迫害していることを大きく宣伝する。ネタニヤフ首相は神聖なモスク内にイスラエル警官を送り込み混乱を暴発させることで、その工作に手を貸す。

工作員らは、イスラエルの警備体制を妨害するためにイランからの武器や装置で可能になる攻撃計画を思いつく（そしてイランに罪を着せる）。

ハマス内部に潜入した工作員らは慎重にことを進める。その際、パレスチナの人々の積年の怒りや苦痛をかきたて、無理だと考えるハマスの理性を押し殺して実行に踏み切らせるという見通しだ。

こんな推測で十分な説明がつくなどとは思っていない。だが、調査がおこなわれた結果、このような推測が、この先、展開されるであろうどんな公式説明よりもより真実に近いことが証明されたとしても、私は驚きはしない。

まずここで「イスラエル工作員がハマス内部に潜入していたのかもしれない。ちょうどＦＢＩがトランプ支持者や愛国者集団のなかに潜入して連邦議会への襲撃をあおり、彼らがテロリスト呼ばわりされるようになったのと同じように」とあることに注目してください。

ここで「ＦＢＩがトランプ支持者や愛国者集団のなかに潜入して連邦議会への襲撃をあおり」とありますが、ＦＢＩがトランプ支持者や愛国者集団のなかに「潜入」したとするロバーツ氏の指摘に驚かれるかも知れません。

しかし、ＦＢＩのこのような活動（いわゆる「コインテルプロ」）はアメリカ史のなかでは何も珍しいことではありませんでした。そこで以下では、項を改めて、そのことについて少し説明したいと思います。